

大相撲の一場所が終るたびに、そくばくの空虚を感じる。時間がきて、テレビには何も映らない月曜日。一場所のドラマを見つけたあとに虚脱感。そんな日が年に六度もあって、興奮が醒めたあとの悲哀を、ちよっぴり味わわしてくれるのだ。

テレビを消した一室のテーブルを前にして、コーヒーをすすっていても、心はすっかり手持ち無沙汰になっている。夏場所は、一横綱、一大関の誕生をみて華やかだった、不振だった力士たちのことが妙に眩に浮んでくる。牀をこわしているとしか思えない北天祐。取組の前後でがらっと人相が変る旭富士。家賃が高すぎた栃司。負けると今にも死にそうな顔をする陣岳。そう、そう、忘れていた、誰からも評価されず、幕内を上下しながら、何を楽しみに相撲をとっているのかわからない蔵間とか大徹。みんな愛すべき力士たちです。

『若き日の山』と私

中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授)

私、山は

今年も夏山シーズンがやってきた。東京の新宿駅は、山登りに出かける乗客で賑わっている。だが、当今はその山登りも一種の集団フアッションと化しているようで、私のように、若き日のあの嶺、この嶺に、ときには切ない想い出を残している者にとっては、戸惑うことの方が多し。山登りという現代文明^{文明}の変貌だといえようか。朝夕に北アルプスを望む松本の街中に生れ育った私は、中学三年生の頃から山登りを始めた。高校、大学と山岳部にも籍を置いたけれど、どちらかという単独行が多かった。とくに高校三年の大学受験の時期と浪人時代、つまり十八歳から十九歳の時期には、山に誘われて、多感な青春をようや

く支えてきたような気がする。

そんなとき、私はいつも申田孫一氏の著『若き日の山』(河出新書)を携えていた。高校時代にフランス語をやっていたこともあって、ヴァンサン・ダンディの「フランスの山人の歌による交響曲」の華麗な交響的世界に魅かれたこともあったが、もっと淋しいものであった。『若き日の山』には、私の好きなフランスの山の歌、

「美しき緑よ(O belle verdure)」も楽譜入りで載っていたけれど、「風の伯爵夫人」とか「孤獨な洗禮」といった申田氏の名文がいつも私を慰めてくれた。いつしかこれらの文章を語んじていて、自分のノートに自分の作品のように書き連ねたこともあった。

そんな私も、やがて現代中国を研究する道へと転進したのだが、大学入試の際の面接で、「なぜ外語を選んだのか」と聞かれたとき、私は、気はずかしくもなく、「外語には申田孫一さんがいるか

らです」と答えたことを、いま初めて告白したいと思う。「なぜ中国研究を志したのか」と問われることが多いので、一九五〇年代中頃の平和五原則やバンドン精神に象徴される新生中国に共感したからだといった説明を一応はするのだが、実際には、右のような経緯もあったのである。

昨今

今、『若き日の山』の書き込みを見ると、「一度著者に逢ってみたい。その日を楽しみにしている。一九五五年五月九日夜」とある。そして、私は大学入学とともに、申田先生が部長であった外語山岳部に入ったのだが、在学中は、物置き小屋のような部屋に申田先生がときどき現われたときにも、ついに、そんなことは申しあげずに、遠くに申田さんの存在を感じているだけであった。

『若き日の山』を愛読したときから三十年以上が経過した。この間に申田先生は外語を去られ、現在は私自身が外語大で教鞭をとる身

山王

になつてゐる。山岳部OB会や串田先生を囲むパーティなどでスピーチを求められる機会もあつたが、右に述べたようなことは言い出せるものではなかつた。

それはおそらく、私にとつての若き日の山が、「去つて行つたものの空しさ」とそれを眺めようとする悲しい追憶」のみの宿る「失われた樂園」だつたからであり、今、このことを記す機会を得たのも、やはり三十年余という歳月の偶然のいたずらだとしか言いようがない。

あれほど山を愛し、山を画き、山を語つた串田先生から、遂に山登りを断念された旨の御自作の絵ハガキをいただいたのは、三年まえの夏であつた。その後後に串田先生は、「何故 山へ登らないのか」というエッセイを「朝日ジャーナル」(一九八三年七月十五日号)に書いておられる。たしかに、串田先生の「若き日の山」も私の若き日の山も、もう探し求めるこ

とは難しいのかもしれない。

中学三年の冬であつたか、大町スキー場の一夜、グルマストープを囲んで、小屋主の伊藤正一さんの弾きギターに私の即興のヴァイ

奥山半僧坊

後藤比奈夫

人の世に梅雨の深さといへるものさみだれを好きとも嫌ひとも言はず杖突いて六根清浄にも似たる下関に小乗悟入幾仏磐を打つときの痛さは瀧とても受杖といふべかりけり露に突き浜名湖の奥で湧く霧見届けし霧飛んでゐても黄首の見ゆる距離

オリンでロシア民謡やシャンソンを弾き明かしたこともあつた。伊藤さんは、今日でも三俣蓮華小屋などを経営されているユニークな山の思想家である。

高校一年のときの北ア単独縦走

も暴風雨に見舞われた苦しい山旅であつたが、浪人中の十九歳の夏は、当時、北アの秘境といわれた雲の平を当てもなくキャンブして歩いたこともあつた。その雲の平

も、いまではすっかり俗化してしまつたのが悲しい。

なんとか、私の若き日の山はなにものかと、数年まえ、子供たちを連れて、いまは廃道に等しいよ

たことがある。さすがに、このコースは人に会うこともまれで、久々に若き日の山を満喫させてくれた。途中の岩魚止小屋は、いまでも囲炉裏に薪を燃やし、夜はランプという生活ぶりであつたし、小屋の主人、奥原英考さんは、北アの蝶をかたどつた手描きの美しい年賀状を一登山客の私に届けてくれた。

ゲッティンゲンの記念板

高野光司
(ゲッティンゲン大学教授)

ドイツの都市を歩くと、古い家の壁に、偉人達が住んでいたこと